児童英語教育の評価

――コミュニケーション活動についての考察――

杉　山　亜　耶

1　研究課題

『英語が使える』という英語によるコミュニケーション能力の育成を標榜した目標から 2011 年度から公立小学校で外国語活動が必修化され、総合的な学習の時間の中での国際理解教育としての英語とは異なった教育を行うこととなった。それに伴い、英語を外国語活動として扱っていくための様々な課題も生じてきた。外国語活動の中心となる英語能力と国際理解は無関係に独立した学習項目ではない。コミュニケーション能力の向上のためには、基本となる英語能力と、コミュニケーションの基盤となる国際理解との統合的な学習が必要になるのではないだろうか。

本研究では、世界の人や物、文化についての国際理解、英語の単語や文章などの英語能力、相手に自分の思いを伝えるコミュニケーション能力の 3 つを統合的に教えることの評価を試みた。明星大学で行われる明星サマースクールプロジェクト（MSSP）は英語教育のデータ収集の場として研究のために公開されている。著者は MSSP で収集したデータをもとに児童の学習を分析する。本研究は、今後始まる公立小学校における外国語活動の中で、コミュニケーション能力の素地の育成と国際理解の統合的な教育の手法を探り、小学校での英語教育における適切な目標を見定めることにより、今後の小学校英語教育のカリキュラム構築の方向性を提示することをねらいとしている。

2　児童英語教育の現状と評価の試み

小学校での外国語活動は手段と目的が混同しているとバトラー後藤

（2005, p. 239）は指摘している。手段と目的が明確に示されていないままの曖昧な英語教育では、英語教育が広まるにつれて教育方法や内容に差ができることになる。2011 年度から始まった外国語活動の中で、コミュニケーション能力と国際理解、英語能力がどのように教育の中で扱われていくべきかなど英語教育の中での手段や目的を明確にし、教育内容も統一していくことが必要となる。では、実際小学校ではどのような英語活動が行われてきているのか。本項ではバトラー後藤（2005）の記述をもとに小学校における今までの英語活動の内容、および問題点を概観していく。

小学校における英語活動では、英会話的な活動や地域の外国人を招いての交流会などが行われている。また、研究開発校では、教科として英語を導入することや、他の教科を英語で教えるなどの活動に取り組んでいる学校もある（p. 12）。授業は、ALT による授業、担任、ボランティア、保護者による Team-teaching による授業、日本人の英語専科教員による授業、地域に在住の外国人による活動など、様々な方法で行われている（pp. 12 - 15）。学習項目としては､児童が日常生活で触れる身近なものが取り上げられているが､簡単なあいさつ、自己紹介、天候、月日、家族、仕事、食べ物、スポーツ、動物など学校によって様々である。

児童へ英語をどう教えるかを議論する場合には、実証的データをもとにした児童の学習の評価が不可欠である。しかしながら、児童の英語コミュニケーション能力の育成における国際理解や英語能力の果たす役割に関して実証的なデータに基づいた研究は限られている。そこで、本稿では次に、児童の英語学習の評価に関しての過去の研究を概観し、評価を通して、どのように小学校英語教育の抱える課題にアプローチできるかを考察したい。

2-1　二つの側面からの評価方法と形成的評価

評価といって、まず思い浮かぶ児童の学習到達度のテストは、英語能力の測定であり、評価のための情報源の 1 つにすぎない。ブラウン（1999）は、評価について「評価はテストをひとつの情報源として含むが、評価はテストに限定されるものではない」（p. 316）と述べている。児童の英語学習を評価するためには、意欲・関心のような情意に関して、また英語能力のような学習に関してなど、様々な側面から測定しなければならない。小学校での英

語教育の目的は、多くの国で言語知識・スキルの習得などの学習面と意欲・関心などの情意面での 2 本柱で設定されている（バトラー後藤 , 2005）。バトラー後藤は、この 2 つの間に相関関係があることを予想した上で、2 つを独立した構成概念であると考え、別々に評価する必要があることを述べている（p. 217）。この 2 つに対する評価として、樋口（2003）は、言語知識・スキルの習得などの学習面を「理の度合い」とし、意欲などの情意面を「情の度合い」として、この 2 つの側面からの評価の必要性を示している。

本研究では、児童がコミュニケーション能力を身につける過程を、形成的評価を用いて質的に分析することを試みる。ジョンソンとジョンソン（1999）によると、形成的評価とは、プログラムの進行過程を詳細に扱い、定期的な間隔で実施される評価であり、カリキュラムの改善と開発を第 1 の目的としている。

Gattullo（2000）は、イタリアの小学校で英語を外国語として学習している児童に対して教室観察、録音などを質的に分析することで形成的評価による測定を行った。その中で、教師と生徒の日々の教室での行動を多面的に評価する重要性を示唆している。また、一方で、教師によって形成的評価がうまく活用されていないことも指摘している。本研究では英語コミュニケーション能力の日々の向上の形成的評価を学習者の心理的、また情意面に焦点を絞り行う。

2-2　MSSP における英語学習の評価

「児童英語教育の評価」に関する研究を行うにあたって、杉山（2009）は 2 年間の MSSP において小学生クラスを対象に数量的、および質的データを収集した。杉山（2009）は 2 年間にわたり、MSSP に参加した児童延べ 127 人を対象に、英語能力の伸びを測定するために事前事後テストを実施した。測定の対象を単語彙能力と会話能力として、テストの得点を T 検定で比較し、事前と事後のテスト結果に有意差を確認している。

本研究は、児童の学習過程における、英語コミュニケーション能力と国際理解、英語能力の関係の描き出し、「英語が話せる日本人」という目標へ到達するための小学校英語教育のあり方を探ることに研究課題を置く。そのために、先行研究で成果が確認された MSSP の中で、個々の児童がどのよう

なプロセスを経て国際ボランティアなどへの関心を高め、それを英語能力に結び付けていったかを、教室内における教育現場の視点から質的に分析を行っていく。

本研究はこの児童の英語学習の評価の研究成果をもとに、児童のコミュニケーション能力、英語能力、国際理解の関係に焦点を絞り分析を行う。

MSSP では 2004 年度から、小学生を対象に大学生が英語教育を行っている。また、2005 年度からは文部省の「特色ある大学教育研究プログラム」に認定され、NGO 団体と提携し、世界各国からボランティアを招聘して、明星大学の学生とともに team-teaching を行っている（杉山 2007、田中・深田 2003）。MSSP は、教職を目指す学生が、相互作用の中で小学生への英語教育、ALT とのかかわり方などの知識を社会的に構築していく場でもある（Tanaka & Ogane, 2010）。

MSSP では、授業が開講される 6 日間のために、学生は教師として、チームごとに教案や教材を考え、準備をする。教案も教材もそれぞれチームで用意したものであるために、チームによって様々な授業が作られる。また、授業 1 週間前から、各チームに国際ボランティアが加わる。国際ボランティアとは、国籍も年齢も様々な海外からのボランティア参加者である。

2007 年度 MSSP の小学生クラスでは、1 日 3 時間ずつ 6 日間の授業を行った。6 日間で 18 時間の授業時間があるが、最初の時間で開校式等の行事があるため、各クラスの授業は 15 コマであった。各クラス、12 人の児童が参加し、全部で 6 クラス開講された。

2008 年度 MSSP の小学生クラスでは、1 日 4 時間ずつ、6 日間の授業を行った。6 日間で 24 時間の授業時間があるが、最初の時間で開校式等の行事があるため、各クラスの授業は 21 コマであった。各クラス、10 人の児童が参加し、全部で 5 クラス開講された。

このように本研究では、2 年間にわたり MSSP で小学生対象の 11 クラスを研究対象とした。このような場で、「児童英語教育の評価」を分析することで、国際理解、英語能力、コミュニケーション能力の 3 つの異なる目標を持った英語教育プログラムの中で児童の学習を考察する。

MSSP では、小学生全クラス共通のカリキュラムをもとにそれぞれのクラスで教師が参加者の学年や学習経験を考慮しシラバスを作成する。小学生ク

ラス共通の教育目標として、

・英語活動を楽しみながら英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ。
・英語活動を通して、コミュニケーション能力を図る。
・英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
・違う国の文化、言語、人に対して「知りたい・伝えたい」という気持ちの育成を図る。
・単語だけでなく、フレーズ、文章を使って表現できるようになる。

という国際理解、英語能力、コミュニケーション能力の 3 つの異なる目標を含む 5 つの項目をあげた。これらの目標は、現在すでに英語教育を行っている小学校で目標とされているものを参考に MSSP の学習環境に適合したものを設定した。

3　研究アプローチ

3-1 データ収集

本研究では、評価ノートやインタビューを用いて児童の参加の様子、個人評価など複数の質的データを収集した。質的データを扱うことで、具体的な例を描写し、教育現場で何が起こっているかを当事者の視点で示すことができる。そのため、質的データの収集として、以下の方法を用いた。

・評価ノートによる教師から見た児童個人の様子
・小学生・保護者・教師へのインタビュー

これらの質的データによって、児童の情意面を中心とした学習成果や、コミュニケーション能力の向上に結びつく学習のプロセスを考察することを試みる。

評価ノート

評価ノートによる児童の個人評価は、児童個人の総合的な評価のために行った。この評価は、小学生クラスを担当した教師全員に自分のクラスの児童について、毎日の反省会でその日の児童の様子を話し合い書いてもらうことで、児童の様子を学習、意欲、関心、態度など、全ての点から観察してもらっ

た。教師全員に毎日児童の様子を話し合ってもらうことで、1 人の教師では把握しきれない人数の児童に対して個人的な評価を行うことができた。また、児童を個人別に総合的な評価をすることで、1 人 1 人の児童の 6 日間の英語学習における成果や内面的な変化を観察できると考えた。それと同時に、この評価ノートによって児童の性格や英語に関する知識・興味を知ることができ、それによって数量的なデータで表れた結果を理由付けることができると考え、児童の個人評価を行った。

インタビュー

MSSP 開講中に、実際に MSSP に参加した児童や保護者に対して、MSSP や英語を学ぶことについてどう考えているのかに焦点を絞り、非構造的インタビューを実施した。児童には、主に、授業初日から最終日にかけて、MSSP に対しての感想や英語に対しての考えを聞いた。また、保護者には、児童の様子や英語に対する考えを聞いた。教師へのインタビューでは、評価にあらわれた成果の理由を探るため、テストやクラスの評価で、数量的分析によって大きな変化が見られた児童の様子や学習態度を聞いた。このような方法で小学生クラスについてのデータを収集した。

本研究では、ここまで述べたような数量的データと質的データの分析により、短期間の英語の集中授業によって、児童の得たものの多角的な分析を試みた。

3-2 分析方法

本研究では質的データを用いることで、各クラスの異なる教育アプローチの中で、学習者の動機、興味、教師との関係など、学習者は情意面にどのような影響受けるのかに注目し、学習習熟度、自発的な発話や国際ボランティアとの関わり方、さらには英語に対する意識を観察することにした。

本研究は普遍性を主張するものではない。しかしながら、本研究の分析は、小学生に対する英語教育が行われている現場の状況と本研究の状況を比較することにより、移行性を読者が判断できることを期待している。

4　データ分析

本章では、MSSPにおいて、2007年度と2008年度の2年間を通して小学生クラスで様々な角度からデータを収集し、短期間の訓練を受けた教師が児童に英語教育を行った成果について分析する。

4-1　MSSPにおける児童の情意面に関する評価

MSSPに参加している児童に行ったインタビューから、児童はサマースクールで楽しみながら英語を学んでいることがうかがえた。授業の始まる前や休み時間に児童にサマースクールに参加してどう感じているか尋ねたところ、「英語でゲームとかして楽しい」（インタビュー、タダシ）というように英語を使った活動を楽しんでいる児童が多く、最終日には、「また来年も来たい」（インタビュー、シホ）、「夏休みだけじゃなく普通の日もやってほしい」（インタビュー、ユウタ）など、英語の授業に対する積極的な参加意欲もうかがえた。さらに、児童の保護者から、児童がMSSPに参加して積極的になり、楽しく英語活動に参加している様子も聞くことができた。シズコの保護者は、「今回サマースクールのことを知って、子どもに勧めたんですが、初めはあまり乗り気じゃなかったんですけど、だんだん慣れてきたみたいで、今では楽しそうにサマースクールに行って、帰ってからもサマースクールの話を嬉しそうにするんですよ。」（インタビュー）と話し、シズコが英語活動を楽しみ、積極的に活動に参加している様子がうかがえた。

このように、各クラスの教師のクラス評価、児童や保護者へのインタビューから、MSSPで英語の学習をすることによる、児童の情意面の変化が見えてきた。児童は、教室内で使用される英語への関心が高まり、活動を楽しみながら英語を使用する傾向が強まる。さらに、英語を学習することで児童の英語への自信につながり、より積極的になり学習を進めているように感じられる。このことから、英語教育を受けることで児童の英語に対する「楽しみ」「積極性」に変化があらわれやすいと考えることができる。さらに、杉山（2009）の研究は、このような児童の情意面の向上が学習成果に影響を与えている傾向を示している。次に英語能力の向上と情意面の向上がコミュニケーション能力育成にどうかかわるかを、それぞれの児童の学習の過程に焦点をあてて

考察していきたい。

4-2 学習成果が大きい児童

次に、児童の学習について児童個人に焦点を当てて分析を試みる。ここでは、杉山（2009）のテストによる学習評価から学習成果が大きかった児童に注目することで、学習が効果的に行われた児童の傾向を探る。

教師による児童の個人評価を分析した結果、MSSP への参加を通して効果的な学習が行われた児童には、積極性、協調性、人とのかかわり方に共通点があることがうかがえた。テストで確認された英語力の向上は、学習における人とのかかわり方と関係している可能性が示されているのである。

MSSP 参加前後のテストの得点差が 20 点以上の児童に注目したところ、共通点として積極的に授業に参加、または MSSP を通して積極的に授業に参加するようになったということが教師による児童の個人評価から見られた。

サオリ：常に前に出て explain をきこうとしている。積極的にアクティビティに参加している。（低学年②クラス教師による評価 , 2 日目）

リク：積極的に手をあげ、全てにおいて自発的に行っている。（高学年⑥クラス教師による評価 , 4 日目）

また、クラスで教師や国際ボランティア、友だちとコミュニケーションを取ることができるということも多くの児童に見られた。

サオ：分からない時は質問するようになってきた。（高学年⑤クラスの教師による評価 , 2 日目）

ナツコ：だんだん積極的にはなってきていて、国ボラ（国際ボランティア）に対してもコミュニケーションを図っていた。（高学年⑥クラス教師による評価 , 2 日目）

英語に対する関心も高く、コミュニケーションをうまく取ることができる

ため、わからないことは聞いて理解するという学習ができると考えられる。さらに、協調性があり、周りを良く見て動ける児童も多く、理解できていない友だちに教えることができる児童も見られた。

ユウキ：人に教えてあげるなどしている。（低学年②クラス教師による評価 , 4 日目）
タクヤ：周りに教えてくれる。（低学年②クラス教師による評価 , 3 日目）

このように、学習を行う際、児童の英語学習の過程の特徴として、教師、友達などとかかわりを持って学習を社会的に進めていく様子が見られた。とりわけ英語能力の伸びが大きな児童は、日本語が通じない国際ボランティアにも積極的にかかわっていくことが、担当した教師によって語られている。マユカのクラスの教師であるケイは、マユカについて「最初は Mario を怖がっていたけど、途中からみさ（日本人教師）と一緒に Mario に話しかけに行ったりしてました。」（インタビュー、ケイ）と答えている。このように国際ボランティアに積極的にかかわろうとする児童は、授業で習得した英語能力をコミュニケーション能力に昇華できる可能性を秘めており、同時に国際ボランティアとの接触により、得た国際理解への関心を、学習の過程の中で、そのままコミュニケーションにつなげることができると考えられる。また、学習成果の高い児童が多いクラスでは、単なる文法や単語を重視した特定の単語や表現を発話するための一方的な情報伝達ではなく、双方向的な意味の構築を行う活動を重視している例が多く観察された。活動内容を分析すると、英語学習での活動と、従来のコミュニケーション活動と呼ばれるものとの違いが明らかになってきた。

従来のクラスで多く行われるコミュニケーション活動とは、例えば、自己紹介の授業で、友だちの名前を聞いて、名前を確認した後に、カードにサインをしてもらう活動がある。インタビュー活動によって指定された情報を集める活動である。この活動では、児童は多くのサインをもらうために多くの人に名前を聞いてまわる。たまたま、その児童がすでに名前を知っている場合でも ‘What’s your name? ’ と質問することになる。つまり、決められた英語表現を使用するために、自分自身がすでに知っていることを質問し、相

手の答えを聞くという結果になることもある。その中では、質問も答えも予測可能であり英語を使用することが活動の中心となる。そして本来コミュニケーション活動としての自己紹介の持つ、相手の名前への関心や新たな人間関係の構築の入り口という社会的な意味は薄れてしまう。そのため、児童は会話のやり取りの中で意味を重視せずに、機械的に決められた表現を使用してしまうことが考えられる。

一方、国際ボランティアに話しかけるなど、コミュニケーション行動を積極的にとる児童のクラスでは、より社会的な意味を強調したコミュニケーション活動が導入されている例が多く観察された。例えば、体調に関する授業は、次のような手順で活動が進められる。まず、‘I am sick.’などの体の不調を訴える表現が書かれた紙を児童に配る。児童は紙に書かれた文章の意味を教師、あるいは友達に英語で聞き、絵に描く。この活動で児童は、初めは配られた紙に書かれた文章を読むことができず、書かれている文章の意味もわからない。児童ができることとしては‘What's this?’という表現を使って文章の読み方と意味を尋ねることである。児童は文章の書かれた紙を持って、その読み方と意味を教師や他の児童に聞いてまわる。この時、その文章を知っている人は、読み方を教え、日本語を使わずに英語やジェスチャーなどで意味を伝える。意味を尋ねた児童は文章の意味がわかったらその状況を絵に描くことで理解を示す。1 つの文章の意味がわかり、絵が完成すると次の文章が書かれた紙をもらい、またその文章の読み方と意味を聞いて回る。これを繰り返すうちに、児童の中で知っている文章が増えていき、さらに、児童の周りに教師以外にも答えを教えてくれる人が増えていく。そのため、児童は教師に尋ねるだけでなく、他の児童に尋ねて答えを知るという状況が多くなり、児童は尋ねるという活動と共に、答えるという活動も行うことになる。

このような活動では、児童は実際に知らないことを知るために質問をしている。また、質問に答える時にも自分自身が相手に情報を伝えることだけでなく、社会相互作用を通じて意味を創り上げることを目的として、英語を使用している。そのため、英語学習のために決められた正しい英語を使用するという意識をせず、使用可能なコミュニケーション資源の重要な一要素として英語を使用するという児童の様子が観察された。このような活動は、情意

面においても児童にとって効果的であったようだ。また、文法を意識させ過ぎず、伝える意味に焦点を置くことで、英語活動への心理的な負担を減少させることが考えられる。そのために積極的に教師や、国際ボランティア、または友達に英語で話せるようになる。また、このようなコミュニケーション活動では、「教師＝教える人」のように教える人と教えられる人が固定されておらず、児童は状況によって教える側になることも教えられる側になることもある。つまり、お互いの持っている情報を交換し合う活動を取り入れることで、知っていることを教え合うという活動にもつながる。従ってこのような社会的な意味を考慮したコミュニケーション活動が、教え合うという相互依存的な関係を構築する中からコミュニケーション能力の向上を促す要因となることも考えられる。さらに、このようなコミュニケーション活動を行うことで、児童は意味を持って活動に参加することができ、そのことが児童の英語学習に対する動機を高め、情意面の向上につながると考えられる。その結果、学習した英語知識や、異文化に対する関心を英語コミュニケーション能力に昇華できる可能性を示している。

現状では、従来のコミュニケーション活動と、積極的にコミュニケーションをとる学習者の多いクラスで多く見られたコミュニケーション活動とが区別されることなく同じようにコミュニケーション活動と呼ばれている。しかし、この 2 種類のコミュニケーション活動は、英語教育の上で大きな意味の違いを持つのではないだろうか。一方は、一方向的な情報伝達が目的であり、教える側と教わる側という力関係が一定であり、内容より正しい英語表現の使用を重視した活動である。もう一方は、双方向的な情報交換であり、その中で教える側と教わる側という力関係が状況により変化し、英語を 1 つの道具ととらえ情報交換の内容を重視する活動である。本研究のデータからは、後者のようなコミュニケーション活動は相互依存的なコミュニケーションを触発する可能性が考えられる。さらに、すでに知っていることを尋ねる前者に比べ、後者では、考える楽しさを感じさせることで情意面に対する良い影響が期待できる。このような活動の違いは、教師がコミュニケーションをどうとらえるかによって異なるのではないだろうか。

本研究では、児童の学習の様子を評価・分析することで、英語能力、異文化への関心がどのようなコミュニケーション活動の中で統合され、児童の学

習に貢献するかを考察してきた。5 章では、本研究の結論に加えて、明らかにされた児童の学習の様子から示唆された、今後の小学校における英語教育の可能性に言及する。

5 まとめ

本研究では、児童の学習を評価の中で、児童の英語活動を楽しむ、英語活動に対する興味・関心を高める、積極性の向上、協調性の向上といった情意面の変化が観察された。さらに、この情意面の変化によって学習成果が現れることも確認された（杉山 , 2009）。情意面への成果が大きいほど学習面への成果もあらわれる傾向があり、情意面の成果が大きいクラスでは授業内で獲得した英語能力や国際理解を実際の英語コミュニケーションに活用しようという気持ちが強まる可能性が示された。しかし、活動を楽しむといった情意面への成果が常に学習面に結びつくとは言えず、学習面に結び付けるためには、楽しみといった 1 つの要素だけではなく、学習に対する意欲や積極性が重要な役割を果たしているようだ。このことは、国際理解学習などの英語に対して興味や関心を持つことを目標とした楽しい活動を通して、内容を重視した活動に積極的に参加させることで、児童が無意識のうちに英語学習に対する意欲が一層高まる授業が実現し、児童の英語学習がより効果的なものとなることを示している。また同時に、英語能力をつけることで、高まった意欲を実際の英語コミュニケーションに結びつけることの重要性も示唆されている。

児童は英語活動を行う上で英語学習を意識せずに活動自体を重視するため､教師側が活動を通して児童の英語学習を促すことが大切であると考える。英語能力、国際理解の要素が活用されてコミュニケーションが成り立つような構造が組み込まれた活動が、コミュニケーション能力の向上に貢献することが確認された。

児童のコミュニケーション能力の向上の学習動機を高める方法として、従来の一方向的な情報伝達を目的としたコミュニケーション活動だけではなく、双方向的な意味の構築を重視したコミュニケーション活動も必要であると考える。本研究では、従来多くの教室で行われているコミュニケーション

活動と双方向的なコミュニケーション活動を区別するため、前者を第 1 コミュニケーション活動、後者を第 2 コミュニケーション活動という活動名称を使うことを提案したい。外国語活動において、コミュニケーションが重視されているが、コミュニケーションという言葉の捉え方は教師によって異なる。これまで述べてきた英語能力、あるいは英語知識、すなわち文法や慣用表現を正しく使う練習を行うためには、第 1 コミュニケーション活動が適し、国際理解に基づいた国際コミュニケーションへの関心を最大限に引き出すために、第 2 コミュニケーション活動が適していると考える。さらに、第 2 コミュニケーション活動を行うことで、文法や正しい表現がわからない時にもあきらめずに伝えるという能力の育成にも繋がる可能性がある。このように、第 1 コミュニケーション活動と第 2 コミュニケーション活動では、育成する能力が異なるため、状況によってこの両方を使い分ける必要がある。

参考文献（日本語）

ジョンソン , K.・ジョンソン , H.（1999）『外国語教育大辞典』 岡秀夫訳　東京：大修館
杉山亜耶（2007）「短期英語学習プログラムが小学生の英語学習に与える影響」川又孝徳編集『明星サマースクールプロジェクトにおける英語学習および教育上の諸問題に関する研究』明星大学（文部科学省教育・学習方法等改善支援経費　教育・学習方法等の改善に関する研究）11-26
杉山亜耶（2009）「児童英語教育の評価：小学校外国語活動導入への展望」 修士論文　明星大学　東京
田中宏昌・深田芳史（2003）「明星サマースクールプロジェクトのエスノグラフィー」『明星大学　研究紀要　人文学部　第 39 号』A1-A18
バトラー後藤裕子（2005）『日本の小学校英語を考える』東京：三省堂
樋口忠彦（2003）『児童が生き生き動く英語活動の進め方』東京：教育出版
ブラウン , J. D.（1999）『言語テストの基礎知識』 和田稔訳　東京：大修館

参考文献（英語）

Gattullo, F.（2000）. Formative assessment in ELT primary（elementary）classrooms: An Italian case study *Language Testing 17*.（2）. 278-288.
Tanaka, H. & Ogane, E.（2010）. Promoting Translocal and Transnational Agency: A Multifaceted Learning Community in Japan in K. Davis（Ed.）. *Critical qualitative research in second language studies: agency and advocacy on the Pacific Rrim*. , Charlotte, NC: Information Age Publishing